ロラン・バルトの言語圏、または幸福なバベル

花　輪　　光

1. バルトの場所

ロラン・バルトの場所、彼の活動の場は、終始、言葉の世界であった (RB, p. 57)。彼の欲望の対象は、変わることなく言葉であった。最初の著作『零度のエクリチュール』(1953) 以来(いや、おそらく青春時代から)、彼が愛し、そしてもちろん憎んできたのは、言葉であった。完全に信頼すると同時に疑ってきたのは、言葉であった (R, p. 99)。

彼は社会関係を「種々の言語活動(種々の言説や虚構や想像物や条理や科学)と欲望(種々の衝動や打撃や恨みなど)との、広般で際限のない摩擦」と見なしていた (RB, p. 169)。彼は、社会関係そのものが実際に分裂していることを否定しはしないが、しかし「そうした実際の分裂は、言語形式のなかに吸収される」、つまり、「分裂し、疎外されているのは言語関係である」と考える (RB, p. 170)。要するに彼は、あらゆる社会関係を言葉の関係としてとらえるのだ。

彼は「政治的なもの（ル・ポリテイツク）」と「政治（ラ・ポリテイツク）」を区別し、前者は「歴史の、思考の基本的秩序」であり、「おこなわれるすべてのことの、語られるすべてのことの基本的秩序」であって、「現実の次元そのもの」であるとした。しかし、「政治」は別のものである。それは「政治的なもの」が「反復される言説」となったものである。彼は「政治的なもの」には深い関心をもつが、政治的言説は容認できないという (VMC, p. 32)。彼の(著作の)政治に対する関係が直接的でなかったとすれば、それは彼がこうした政治的言説の「話し手」になることを拒否したからであろう。彼は「政治的言説」から「政治の現実」を切り離すことができないために、「政治的なもの」から排除される。しかし彼は、少なくともこの排除を、自分が書くものの「政治的」意味に変えることはできる。つまり、彼は、「敏感で貪欲だが沈黙した政治的主体」という矛盾の歴史的証人となるのだ (RB, p. 57)。

彼は「言葉」を「現実」に対して根本的に対立させた。あるいはもっと正確に言えば、ただ「言葉の現実」という審級だけに身を置いたのだ (SFL, p. 141)。言葉に対する彼のアプローチの方法は、つぎつぎに変わってゆくが、彼の全活動は、徹底して「言語主義」に貫かれていると言うことができよう。

2. 言語圏の分裂

彼は言語活動の世界(言語圏)を、広般で際限のない偏執狂的な戦いの場と考えていた。そこではさまざまな体系(フィクション、特殊語法)の戦いがおこなわれている。イデオロギーの体系はフィクションであり、フィクションとは、言語活動が異常に凝固したものであって、共通にそれを語り広めていく聖職者たち(司祭、知識人、芸術家)をもつ。それぞれのフィクションは一つの社会的な語法(集団言語)に支えられているのだ (PT, pp. 46–47)。

それぞれの特殊語法(フィクション)は、恐るべき敵対関係のうちにあり、主導権を握ろうとして争う。権力を味方にすると、日常の社会生活のいたるところに広がり、ドクサ(世論、通念)となり、「自然」となる。政治的な人間の自称非政治的な語法、新聞、テレビ、ラジオの語法がそれである。しかし権力の外にあって、権力に逆らっていても、敵対関係は消えず、さまざまな特殊語法は派閥に分かれて互いに争う (PT, p. 47)。われわれの社会が分裂している以上、言語圏もまた深刻な分裂状態にあるのだ (OL, p. 12)。われわれは現在、「意味の戦争 (意味を廃絶するための戦争) ではなく、意味と意味との戦争をおこなっている」(D, p. 31) のである。

そして、ここにこそ「意味の本性」がある。意味とは「他の意味、他の言語活動を屈服させようとする力」(SZ, XLV) なのである。意味の力は、体系化する力の度合いに左右される。生き残るためには、「敵対者を確認し、説明し、断罪し、吐き出すと同時にとりこんでしまうような」技法を考えだす必要がある (PT, p. 48)。言いかえれば、敵の抵抗をこちらのコードに組みこみ、こちらの説明原理によって説明してしまうこと (PR, p. 302)。たとえば、マルクス主義の語法によれば、敵対するものはすべて階級的であり、精神分析の語法によれば、すべての否認は告白であり、キリスト教の語法によれば、すべての拒否は探求である、等々 (PT, p. 48)。

他方、こうした体系の技法をもたない資本主義的言語活動もある。それは「偏執狂的、体系的、論争的」ではないが、より強力で容赦なくねばりつく。

それはイデオロギーの精髄とも言えるドクサ(通念)である。というのも、イデオロギーとは「他を支配するものとしての観念」(PT, p. 53) だからである。ドクサとは「世間の通念」であり、「多数派の精神」であり、「プチブルジョワのコンセンサス」であり、「自然らしさの声」であり、「先入見の暴力」である (RB, p. 51)。それは「ごくあたりまえのこととして繰り返される意味」であり、「自明の理」である (RB, p. 126)。さまざまな社会的言説や大規模な集団言語が群れ集う言語圏には、二つの支配の方式、「征服」と「統治」とがあるが、ドクサは征服するのでなく統治することで満足する。つまり、合法的に、自然に支配するのだ (RB, p. 156)。

そして「自明の理」以上に暴力的なものはない。「あたりまえのこと」は、たとえそれが静かに、民主的に表明されたとしても、「真の暴力」となる。とっぴょうしもない法律を発布する暴君よりも、「あたりまえのことだ」と言ってすませる大衆のほうが暴力的なのだ。「自然らしさ」は暴行の最たるものである (RB, p. 88)。

3. 修 辞 学

バルトは言語戦争の源を修辞学の伝統のうちに見る。いわゆる修辞学は、古代ギリシアにおける階級間の露骨な争い、とりわけ所有権の争い(訴訟)に端を発した。その唯一の目的は、第三者を説得することにあった。中世においては、この修辞学の流れは、スコラ学(とりわけ「討論」)を通じて、「攻撃のコード」(AR, A・6・1) に変わっていくと見ることができる。

修辞学の伝統は、中世における三自由学科(文法、修辞学、論理学または弁証術)に受けつがれ、12–13 世紀にはとりわけ弁証術が支配的となるが、バルトによれば、弁証術は二人でおこなう弁論の術であり、「三段論法の戦い」であり、「二人の競技者が演ずるアリストテレス」である (AR, A・6・10)。この対話にはプラトン的なものは少しも含まれていない。プラトンにあっては、修辞学とは、共に考える「愛の対話」であり、弁論の基本的様式は、「愛の霊感によって結ばれた師弟の対話」にほかならなかった (A・3・2)。しかし中世の弁証術にあっては、師に対する弟子の原理的な服従は最初から問題にならない。対話はあくまでも攻撃的で、勝負を争うものであった (A・6・10)。たとえば、優秀な学生だったアベラールは、師を論破してその聴衆を奪い、師に学説を放棄させ、文字どおり師を清算してしまう (A・6・1)。

弁証術は最後には一種の訓練、儀式、スポーツとしての討論 (disputatio) と合流する。バルトによれば、こうした「討論」の「神経症的意味」は、ギリシア人の「格闘」(maché) の観念にまで遡って考えるべきだという。ギリシア人(ついで西欧の人間)の闘争本能にとっては、自己と矛盾することは耐えがたいことであって、相手を抹殺するためには、相手を自己矛盾に追いこめば十分なのである。そのための武器が三段論法だった。対決があまりにも激しかったので、討論はコード化され、スポーツ化され、ついには姿を消すが、言葉の遊戯の規則は今も残っている。今日でもなお、われわれは、書かれた文章、シンポジウム、討論会、日常会話、口論など、いたるところで、アリストテレス的「三段論法」にしたがって議論していると言えるであろう (AR, A·6·11)。

言語活動にあっては、すべてがコード化されている。中世の「討論」もまた例外ではない。いやむしろ、そうした言葉の対決ほどコード化されている度合いが大きいのだ (PR, p. 299)。「世界のいわば言語的本性」に注目した中世の社会は、言葉と言葉の対決を終わらせるのは真理ではなく、言葉の力の優劣でしかないと考えた。そこで、遊戯の精神にのっとって、この力をコード化し、「応答の無限の反復」を「恣意的」かつ「必然的」に止めさせるための作法を生みだした。それが知的スポーツとしての「討論」なのである (SZ, LXV)。

「討論」の命題の材料は、「アリストテレス修辞学」の論証的部分に由来している (AR, A·6·10)。バルトによれば、「アリストテレス修辞学」は、とりわけ立証の、推論の、近似的三段論法 (エンテューメーマ) の修辞学であった (A·4·3)。が、その「三段論法的修辞学」(A·3·3) は、「意識的に程度を落とし、«公衆» の、つまり常識の、世論のレベルに適用された論理学である」(A·4·3)。それは現代のいわゆる大衆文化にもうまく適合する論理学である。「修辞学」の源であるアリストテレスと、大衆文化とのあいだには、根強い一致点があるのだ。格下げされ、拡散し、不分明になったアリストテレス主義が、西欧社会の文化的実践(«最大多数»、多数決原理、世論などのイデオロギーにもとづく民主主義の実践)のなかに生き残っているのだ (AR, B·3·11)。西欧の文明は、ドクサの文明であって、そこでは「アリストテレス的真実らしさ」、つまり「公衆が可能だと思うこと」が支配しているのである (A·4·3)。

4. 口 論

「意味を投げつけあって互いに戦う大きなイデオロギー体系」の場合も、そ

のモデルとなっているのは常に(夫婦の)口論である (SZ, LXV)。口論の当事者はいずれも「最後の言葉」をかちとることを夢みる。最後にしゃべり、「けりをつける」こと。口論では最後に登場する者が最高の地位を占めるのである。「あらゆる言葉の争いは、この地位を得ることを目指し、口論はこの最後の勝利を目指して展開される」(FDA, p. 247)。

二人の人間が規則的な言葉の応酬によって言い争い、《最後の言葉》を得ようとするとき、その二人はすでに結ばれている(結婚している)のだ (FDA, p. 243)。異議を申し立てる形式と異議を申し立てられる形式とのあいだには、構造的な一致があり、「範列の両項は、結局は共犯関係によって貼り合わされている」(PT, p. 86) からである。しかし逆に、二人がこの関係を維持するかぎり、最後の言葉は得られない。

口論は、「文」と同じように際限がなく、構造的には何ものもそれを終わらせることができない。いったん争いの核(ある事実や決心)が与えられると、拡大(展開)によって無限に引きのばすことが可能となる。それを止めることができるのは、ただ外的な要因だけである。たとえば、疲労、訪問客、攻撃に急に取って代わった欲望、等々。さもないかぎり、相手を沈黙させる強力な理屈はありえず、分析(メタ口論)はさらに別の口論を惹き起こすだけであろう (FDA, pp. 245–246)。言葉の力と力がぶつかる大勝負にあっても同じことである。言語活動について語る言語活動には限りがないのだ。そしてこれが「言語圏を動かしている法則の姿」(RB, p. 54) なのである。

ここから、バルトが好んで用いるいくつかのイメージが出てくる。イタチごっこ、ジャンケン、たまねぎの皮、等々。バルトによれば、あらゆる言説は度数の戯れにとらえられていて、言語活動の段階性には限りがなく (RB, p. 70)、「最終的な返答などありえない」(RB, p. 55) のだ。

5. 恐　　怖

バルトは(夫婦の)口論のなかに暴力の純粋な経験を見てとる。彼は両親の言い争いにおびえる子供のように、口論に「恐怖」を感じ、見栄も外聞もなくその場から逃げだしたくなるという (RB, p. 162)。現代の知識人の生態からすれば、「恐怖」について語るなどはもってのほかであるが、バルトにとっては、すべての出発点にこうした「恐怖」がある (PR, p. 298)。

口論に対して、彼がこれほど強く反応するのは、それが「言語活動の癌」を

あらわにしてみせるからである。つまり、「言語活動は言語活動を終わらせるには無力である」(RB, p. 162) ということ。言い合いは、結論を生みだすことなくどこまでも続き、最終的な暴力(殺人)に到達するが、しかし人は、この最終の暴力については、決して責任をとろうとしない(少なくとも「文明人」はそうである)。口論は、ただ自己を維持することだけに喜びを見出す、本質的な暴力、恐ろしくも滑稽な暴力なのである。

フランス人は互いに争う遊戯の形式(ラグビー、討論会、賭、など)を好むように思われるが、彼はそれが大嫌いである (PR, p. 298)。そもそも彼は、勝利の言葉を好まず、負けた人の屈辱を見るにしのびないので、勝利が予想されると、すぐに「よそへ」行きたくなる。言説の勝利は、それがもっとも正当なものであっても、言葉の悪質な価値の一つ、つまり「傲慢さ」に変わると彼は見る。彼にとっては、「科学」も、「ドクサ」も、「戦闘主義者」も、ともに傲慢である (RB, p. 51)。

言葉の争いにおいて勝利をもたらす「最後の言葉」という観念は、虚妄であり、錯覚にすぎない。としたら、決定的な武器となる「最後の言葉」を手に入れようとする誘惑に打ち勝ち、果てしない言語戦争から、いわば身を引く一種の倫理が必要ではないのか (PR, p. 240)。ここにバルトの「中性の思考」または「中性の志向」、「中性の嗜好」または「中性の試行」の契機がある。

英雄とは、「最後の返答をおこなう人間」である。それゆえ、「最後の返答をあきらめる者(口論を拒否する者)」は、反英雄的な道徳に属する (FDA, p. 248)。ところで、バルト (PT, p. 50) によれば、われわれの言語活動にはまだあまりにもヒロイズムが多すぎるのだ(バタイユにさえ、一種の狡猾なヒロイズムが見られるのだから)。快楽主義者バルトの基本姿勢は、「くつろぎ」であって、それには「一つの倫理的な力」がそなわっている。つまり、「あらゆるヒロイズムを、《快楽に関してさえも》、すすんで放棄すること」(RB, p. 48) である。

しかし、強力な言語体系の支配欲、狂信、人種差別をのがれるのはむずかしい。そのためには、どうすればよいのか。この古い問いに対して、新しい答えはまだない。他の言語体系によって対抗するのでなく、ただ、「判断を中止する」というときのように、「意味を中断すること」、「漂流すること」しかできないだろう。「決して取ろうとせず、しかも決して身を捧げないこと」、この立場を貫くしかないのであろう (RB, p. 64)。中性の思考は決して勇ましくない。しかし、英雄を必要とする時代は不幸である。その不幸をふせぐためには、ほ

かにどんな方法があるというのか。

6. マナ語

バルト (RB, p. 133) によれば、一人の作家の語彙のなかには、常に一つのマナ語が存在するという。マナ語の意味作用は、多様でとらえがたく、この語があれば何にでも応ずることができるような錯覚を与える。それは、自ら動くことなく、他のものに運ばれ、漂流していて、決して枠にはめられず、常にアトピックであり(あらゆるトポスからのがれ)、あらゆる記号内容に取って代わる記号表現である。ところで、バルト自身におけるマナ語は「身体」である、とバルトは言うが、「中性」という語もまた大いにマナ語的である。あるいは、むしろ彼の「中性」概念そのものがまさにマナ的なのである。

言うまでもなく、「マナ」は、ポリネシア語で「力」を意味し、一般に未開社会における超自然の力を指す。レヴィ＝ストロース(「モースの著作への序論」)がこれをゼロ音素の観念と結びつけたのを受けて、バルトはマナを「意味作用のゼロ度」として定義した (My, p. 138, ElS, III・3・3)。有名な『零度のエクリチュール』(1953) における「ゼロ度」は、この定義のとおり、「修辞的な意味作用の欠如」(欠性対立における「無標の項」)を表わす。それはまた、中性の項でもある。「ある極性の二つの項のあいだの中性項あるいはゼロ項という第三項」でもある (DZ, p. 67)。したがって、「純白のエクリチュール」、「無垢のエクリチュール」は、「中性のエクリチュール」、「ゼロ度のエクリチュール」であった DZ, p. 12, p. 67)。

『批評的エッセー』(1964) の一節もまた、同じ線にそって、「中性」概念の重要性を強調する。「われわれの社会は常に、充実した記号に法外な特権を与え、粗雑にも、ものごとのゼロ度を、ものごとの否定と混同している。われわれのもとでは、«中性» に対してほとんど場所を与えず、考慮も払わない。それは常に、倫理的には存在する力のなさ、破壊する力のなさとして感じとられている。しかし、«マナ» の観念は意味作用のゼロ度として考えることが可能であって、このことは人間の思考のある部分において «中性» がもつ重要性を十分に物語っている」(pp. 179-180)。

さらにのちになると、「中性」は、二項対立における無標の項や四項対立における中性項(あれでもこれでもない)ではなく、新たな範列関係の第二項となる。「«中性» は、意味的であると同時に抗争的でもある二項対立の第三項——

ゼロ度――ではない。それは《言語活動の無限の連鎖の一つ先の段階における》新しい範列関係の第二項であって、この範列関係の充実した項をなすものは、暴力(戦闘、勝利、演劇性、傲慢さ)である」(RB, p. 136)。この「範列関係」は、もはや対立的なものではなくて、系列的なものとなろう (ElS, III・3・5)。「暴力」に対して「意味的、抗争的な対立関係」をもつ、暴力的な「中性の項」というのは考えられないからである。

7. 中 和

バルトにおける「中性」は、とりわけ「中和」であり、「中立」である。つまり、言語学的概念としての中性(中和)と、倫理的範疇としての中性(中立)という両面にまたがっているのだ。言うまでもなく、前者は「ある種の関与的対立における意味の消滅」(RB, p. 127) ないし「意味作用の中止」(ElS, III・3・6) を指し、後者は「公示された意味、威圧的な意味の耐えがたい標識を取り去るために必要」(RB, p. 128) である。中性概念はこうして「意味の免除」、「形式の責任」(EC, p. 155)、「記号の道徳性」(RB, p. 101) など、バルトにおける他の大きな問題と深くかかわり、言語的ユートピアのための戦術となる。

要するに、中性とは、「二律背反の反対のもの」であり、「二律背反を一掃し、非現実化する力」に対応するものである (RB, p. 135)。中性とは、「標識と非標識のあいだに位置を占めるもの」であり、一種の緩衝装置」であって、その役割は、「意味論的なカチカチという音」、「範列的な交替を告げるメトロノームの音」を「押し殺し、やわらげ、流動化すること」にある (SFL, p. 112)。バルトにおける「中和」は、二項対立、範列組織の裏をかき、それを「新たな範列組織」に転換させる契機を含むと言えよう。

ここから「中性」のさまざまな姿が出てくる。すなわち、「純白のエクリチュール」、「まことに心地よい非意味化」、「空虚」、「判断の中止」、「繊細さの原理」、「漂流」、「悦楽」、等々。それはまた「能動と受動の平均値」ではなくて、むしろ「往復運動」であり、「無道徳なゆれ」である (RB, p. 135)。中性とは「意味を、規準を、正常さをかき乱すもの」であり、「《平均》の対蹠物」であって、「《中性》の好みをもつということは、必然的に《中間的なもの》を嫌悪するということである」(SFL, p. 113)。言語戦争における「ひけらかし、支配、威嚇をうまくかわし、その裏をかき、愚弄するすべてのもの」(RB, p. 136) である。快楽もまた、「真のエポケー」であり、「あらゆる価値を凍結する停止」

であるかぎりにおいては、「中性的なもの」(悪魔的なもののもっとも倒錯的な形)である (PT, p. 102)。

8. 二項対立

バルトに二項対立の強い好みがあることは否定できない。彼は、この種の対立に常に「ある種の偏愛」をいだいてきた (VMC, p. 28)。とりわけ初期のバルトは、二項対立(二分法)に熱中していた。彼にとって、それは「まぎれもない愛の対象」だった。いわゆる「科学性の幸福な夢」を見ていた1950年代には、それが彼に「たえざる驚き」を与えたのである (RB, p. 56)。

もっとあとになっても、二項対立の形は、彼が好んで用いる対概念(価値の二項対立)のうちに認められる。「一個の意味を産出し、つぎにそれを漂流させうるためにも、範列関係を設定する必要があるのだ」(RB, p. 96)。彼が好んで用いる語は、たいてい対立関係によって一つにまとめられていて、彼はその一方に賛成し、もう一方には反対する。たとえば、生産 / 生産物、構造化 / 構造、体系性 / 体系、等々 (RB, p. 131)。こうした対語が見つかると、「彼には自分のえこひいきが生産的なものに思われてくる」。対語の一つが彼の好きなものを指し、もう一つが彼の好まないものを示す、こうした範列の構造こそ、「彼の欲望の構造」なのである (RB, p. 135)。

二項対立は語彙のレベルだけにかぎらない。彼の言説もまた、「二項形式の弁証法」によって進むように見える。たとえば、ドクサとパラドクサ(逆説)、作用と反作用、ステレオタイプと革新、好みと嫌悪、等々。この「二項対立による弁証法」こそ、「意味の弁証法(有標 / 無標)」そのものであり、「価値の弁証法」である (RB, p. 73)。「価値」は支配し、決定し、善と悪を切り離す。その結果、あらゆるものが好みと嫌悪という範列にとらえられ、世界は強烈に意味作用を発揮するのだ (RB, p. 142)。

しかし他方、二項対立を愛すると同時に、彼は「あらゆる対立関係をうさんくさく感じ」、人を疲れさせる「意味」から逃れたいという衝動にかられる。すべてを武装させていた「価値」が武装解除され、もはや「対立」も「意味」も存在しないユートピアに逃れること (RB, p. 143)。バルトのユートピアが始まるのは、「二者択一が拒否されるとき」、「範列が乱されるとき」なのである。そこでは「意味」も「性」も二項対立の牢獄から解放され、多義的な形式や官能的な実践となって無限に拡散するだろう (RB, P. 137)。

二項対立の原理は、「«ただ一つの差異さえあれば» 何でも言える」ことを彼に教え、これが彼に喜びを与えたのだった (RB, p. 56)。しかし、フロイトが言うように、「少しの差異」は人種差別に向かわせ、「多くの差異」はそこから決定的に離れさせる、というのが本当なら、「必要なのは、どこまでも複数化し、微細化すること」ではないのか。平等化、民主化、大衆化の努力は、「人種間の不寛容の芽」となる「最小の差異」をつみとるのに成功していないのだから (RB, p. 74)、逆に「差異」をふやしてゆくこと。

9. 第 三 項

彼の「もう一つの弁証法」にあっては、両項の矛盾は、やがて発見される第三の項に席を譲るのであるが、「その第三項は、総合ではなくて «方向転換(デポール)» である」(RB, p. 73)。「方向転換」は、「スポーツ」と同じ語源をもち、気分転換、気晴らしを意味する。バルトの「方向転換」は、一種の知的気晴らしでもあるのだ (RB, p. 165)。彼は「ある種の想像力によって対象を «方向転換させる» ことに喜びを感じる」。それは、隠喩的にというよりもむしろ相同的に「全体をずらす」操作である (RB, p. 62)。

第三項は「突飛な、前代未聞の項」である。バタイユは「羞恥」に対して、「性の自由」を対置させるのでなく、「笑い」を対置させた (PT, p. 87)。チャップリンは「差異的であると同時に集団的な文化」、つまり「複数的な文化」、のイメージを与えてくれるが、このイメージは「われわれが閉じこめられている対立関係」、つまり、「大衆文化か «それとも» 高級文化かという対立」を覆えす「第三の項」として機能する (RB, p. 59)。真 / 偽の範列にとらえられない「虚構」という語は、「第三の項であり、漂流の項、前代未聞の項、範列の裏をかく項である」(PR, p. 241)。「酒場は結局 «中性の» 場所である。それは第三項のユートピアであり、«話す / 黙る» という、あまりにも純粋な一対から遠ざかる漂流である」(RB, p. 145)。

この第三項による価値転覆を、バルトは「巧妙な価値転覆」と呼ぶ。それはさまざまな価値に対して対立しようとはせず、それらのあいだをぬって進み、それらを避け、うまくかわす。要は、対立、抗争、攻撃性のなかに落ちこまないこと、「単純な反対項どうしを結合するあの意味的連帯性」に落ちこまないようにすることである (RB, p. 143)。対立するものは、敵にとりこまれる運命にある。たとえば、芸術における前衛とは、やがて敵にとりこまれてしまう反

抗的な言語活動にほかならない。それは、「言説の破壊が弁証法的な項ではなくて、意味論的な項であることから生ずる」(PT, p. 87)。それを避けるためには、逆説的な形式にたよるしかないのだ。バルトがサドについて言っている (SFL, p. 130) ように、もっとも根本的な価値転覆(反検閲)は、必ずしも世論や道徳や法律に反することを言うことにはない。あらゆるドクサをまぬがれた逆説的な言説を創出することにある。挑発ではなく創出こそ、革命的な行為なのである (SFL, p. 130)。

10. 言葉を盗む

たとえば、今日、知識人あるいは作家の歴史的任務は、ブルジョワ・イデオロギーを打破することにあるとしよう。しかし「どこから」非難攻撃し、破壊するのか。「破壊する」ためには、その外部に立つ必要があるが、革命的状況においてでもなければ、それは不可能であろう (RB, p. 67)。事実、今日、ブルジョワ・イデオロギーの外部には言語活動のいかなる場もない。われわれの言語活動はそこに閉じこめられているのであって、「唯一可能な反撃は、対決することでも破壊することでもなく、ただ盗むことだけである」(SFL, p. 15)。

あるいはまた、意図的にブルジョワ意識の内部にとどまるふりをしながら、それを荒廃させ、衰弱させ、分解させること。そしてその分解につきあうことを承諾し、自身自身をも徐々に分解していくことである (RB, pp. 67-68)。というのも、イデオロギーの直接的な批判はありえないからである。イデオロギーとは、反復され凝固した言葉のことであるから、もしイデオロギー分析(つまり反イデオロギー)が繰り返され、固まりはじめるや、それ自体がイデオロギー的なものになってしまうだろう (RB, p. 108)。

言葉と言葉の関係にあっては、侵略、破壊、粉砕といった関係はありえない。盗み、ごまかし、違反し、裏返すしかないのだ。1967年のある対談 (LA) で、バルトはすでにこの点を強調している。作家がブルジョワ社会から取り除くことのできるものは、ただ一つ、その社会の言語活動だけであるが、しかしそのためには、破壊するのでなく「«盗む» ことが必要である」と。ところで、違反するということは、相手を認めると同時に「裏返す」ことであり、「裏返し」は、相手を破壊する「反対」とちがって、対話しながら否定する。知的言説と文学の言説がともに向かうべき「違反の新しい道」は、この「盗む」方向以外にない、とバルトは考えるのである (LA, p. 174)。

実際、『サド、フーリエ、ロヨラ』(1971) の「はしがき」で明確に打ち出された、この「言葉を盗む」という観念は、『零度のエクリチュール』(1953) 以来たえずバルトにつきまとってきたと言える。「あらゆる記号の不在を夢見た『零度のエクリチュール』」(RB, p. 90) が、夢想の対象とした「純白のエクリチュール」とは、文学の領域においてさえ言葉の疎外現象が見られる今日、「決して盗まれないエクリチュール」、「何ものにも順応しないエクリチュール」のことであった。しかし『零度のエクリチュール』によれば、この純白のエクリチュールは、現実には存在しない。常に誰かの手に取りもどされ、順応してしまう。体制によってたえず言葉を「盗まれる」という意味では、作家というものは、悲劇的な作業に専念しているのである。

この時期のバルトにとって、「エクリチュール」や「神話」は、「盗まれた言葉」(My, p. 217) にほかならなかった。しかしその後、「エクリチュール」は、ほぼ逆の意味をもつようになる (R, p. 103; PR, p. 415)。直接的なイデオロギー批判の困難さ、「神話破壊」の不可能性が認識され、「盗む」こと、あるいは「盗みかえす」ことが問題となるにつれて、その「盗む」行為がまさに新しい意味での「エクリチュール」と呼ばれるようになるのである。

11. 神話から文学へ

コノテーションの問題は、疑いもなく、バルトが提起したもっとも重大な記号論的問題の一つであろう。この概念は、イェルムスレウやバルトの名前と切り離すことができない。それはまた、バルトの言語圏を支配するテーマの一つであって、彼の神話学、記号学、文学など、すべての領域にかかわりをもつ。それゆえ、バルトの全面的な検討なしにこの問題にふれることは不可能であるが、少なくとも50年代から60年代にかけて、バルトのコノテーション概念に大きな価値の変動がおこるという事実は指摘できよう。

バルトにおけるコノテーションを、便宜的に二つの面(「神話学」ないし「記号学」と「文学」)に分けて考えるならば、価値の変動がおこるのは、もっぱら「文学」の面においてである。第一の面においては、コノテーションはイデオロギーとして規定される。あるいは、もっと正確に言えば、コノテーションの記号内容の形式が「イデオロギー」であり、その記号表現であるコノテーターの形式は「レトリック」と呼ばれる。しかしいずれにせよ、コノテーション(イデオロギー)は常に否定的価値をもつ。これに対して「文学」の面では、コノ

テーションは、零度のエクリチュール』や『神話作用』において批判的対象となったのち、たとえば『S / Z』(IV) に見られるように、テクストの多義性を実現するものとして、多かれ少なかれ評価されるようになる。

もちろん、50年代の『零度のエクリチュール』や『神話作用』は、「コノテーション」という語を用いていない。それにまた、『神話作用』は、イェルムスレウの図式を援用しながらも、「第二次の意味体系」という表現によって「コノテーション」と同時に「メタ言語」をも指し、「神話」を「メタ言語」として規定するなど、用語が混乱している (My, p. 200)。しかし、『零度のエクリチュール』と『記号学の原理』との合本 (1969) の「はしがき」で、バルト自身が言うように、『零度のエクリチュール』が扱っていたのは、『記号学の原理』と同じ「言語事実」(つまりコノテーション)であり、また『神話作用』が扱っていたのは、「神話体系」としての「文学」である。『神話作用』によれば、『零度のエクリチュール』は「文学言語の神話学」であって、そこでは「文学的神話の記号表現」である「エクリチュール」を破壊すること、「神話体系としての文学」を否定することが問題であった (My, p. 221)。

したがって問題は、神話(イデオロギー)を生みだすものとして否定的価値をもっていたコノテーションが、文学の面でどうして肯定的価値をもつようになるのか、ということである。言いかえれば、神話としての「文学」(「エクリチュール」)が、どうして「反神話」としての文学(新しい意味での「エクリチュール」)になりえたのか。

たとえば、1963年のアンケート(「文学と意味作用」)は、依然として文学を「コノテーションの秩序」(EC, p. 216) としてとらえている。つまり、言語活動が、現実を物語りはじめ、そうすることによって自己目的的な言語活動となると、「転嫁された、とらえがたい第二の意味」が現われ、「われわれがまさに«文学»と呼ぶもの」が出現する、とするのである (EC, p. 266)。しかしここでは、「第二の意味」としての「文学」は、決して否定的に考えられてはいない。デノテーションの直接的な破壊を狙って失敗した前の世代(たとえばシュールレアリストたち)とちがって、現在の前衛的な世代は、とりわけ「文学言語に含まれた第二次のコミュニケーションに関心を寄せ」(EC, p. 274)、文学のこの特殊なステイタスを逆に強調しようとする、とバルトは答えている。

1968年のある討論会での発言 (AlR, p. 32) もまた、「文学は明らかにコノテーションの記号体系である」とする。あるいはもっと正確には、文学は「デノテーション＝コノテーションの二重の体系」であるが、その特質はコノテーシ

ョンにあるとする。いっぽうバルトは、発表に続く討論のなかで、きわめて重要な発言をおこなっている。それによれば、言葉の「純粋な他動性」、「純粋なデノテーション」は、「純粋に無実」であるが、この状態が存在するとは思われない。したがって、多かれ少なかれ発生する「第二の体系」(コノテーション)を、「いわば充実した記号内容」で満たすか否かという「倫理の問題」、「形式の責任」の問題が生じる。この価値基準によって、あらゆる言語活動は、「神話的なもの」と「無実なもの」とに分かれるだろう。つまり、「もっとも無実な体系とは、まさしく第二の体系をいわば満たさずにいる体系なのである」(AIR, p. 38)。したがって、「文学」(コノテーション)が「神話」であることをやめ、「もっとも無実な体系」を目指すためには、徹底して「自動詞的」になるだけでなく、「意味を裏切る」ことによって「第二の体系を満たさないようにする」こと、これ以外に道は残されていないことになろう。

12. 意味の裏切り

文学の自動詞的(非他動的)性格が前面に出てくるのは、恐らく1960年頃と見てよいだろう。この年を境にして、「神話破壊」の試みが中止されるかのように見えるのは、決して偶然の一致ではないと思われる。『神話作用』(1957)はそれまでの成果を集めたものであり、これ以後も「神話」批判(たとえば、「レットル・ヌーヴェル」誌に連載の「小さな神話学」シリーズ)は盛んに続けられるが、なぜか1959年で終わっている。

少なくとも、『批評的エッセー』を通して見るかぎりでは、1960年は一つの境目をなしているように思われる。「絶対的に自動詞的な行為」としての文学、という定式が現われるのは、1960年のエッセー(「カフカの答え」)であり、また、この問題を真正面から取り上げて、有名な「作家と著作家」(ecrivain と écrivant)の類別をおこなっているのは、同名の標題をもつ1960年のエッセーである。「作家」にとって「書く」は自動詞であるが、「著作家」は何らかの目的(告発、証言、など)のために言語活動をおこなう。「作家」は自動的人間、著作家」は他動的人間である、等々。

1961年の「テル・ケル」誌への回答(「今日の文学」)は、モードの体系と文学の体系との類似点をとりあげているが、その『モードの体系』(1967, 執筆は1957–63)によれば、「デノテーションの本当の規準」は、「言葉が他動的であること」であり、「コノテーションの標識は言葉の非他動性である」。そして「非

他動的（非生産的）な記述はすべて何らかの詩の可能性を生む（17・1)。ここで「詩」というのは、ヤーコブソンの詩的機能におけるように「文学」と同義であることは言うまでもない。1964年の「レトリック分析」(AIR, p. 33) は、ヤーコブソンの言語機能説を引き合いに出して言っている。「メッセージそのものが強調されるとき、言説は語の広い意味において詩的となる。明らかに文学の場合がこれに当る。文学（作品またはテクスト）は、とりわけメッセージそのものを強調するメッセージである」と。

それと同時に、1961年の「今日の文学」が強調するのは、モードも文学も、「意味の裏切りの体系」、「記号内容のはぐらかしの体系」であるという点である。「モードも文学も意味作用の体系であるが、その記号内容は原則として裏切られる」(EC, p. 156)。この二つの体系の機能は、「体系の外にすでに存在する客観的な記号内容」を伝達することではなく、もっぱら「運動している意味作用」をつくりだすことにある (EC, p. 156)。それは「みずからのつくり上げた意味を裏切ることを唯一の目的とする意味体系」であり、「決して意味を定着させずに維持していく」(SM, 20・9)。こうした意味の裏切りによって、文学作品は決して答えを与えることなく、「世界に対する問いかけ」を強力におこない、「信仰やイデオロギーや常識が保持しているように見える確かな意味」をゆさぶるのである EC, p. 256)。

したがって、意味作用が固定されない文学（コノテーション）は、凝固した意味作用（コノテーション）としての「文学」、固定された記号内容としての「神話」とは価値を異にするのだ。「《劣悪な》文学」とは「満たされた意味の自己満足にふける文学」であり、「《すぐれた》文学」とは、反対に、「公然と意味の誘惑と戦う文学」である (EC, p. 267)。少なくとも、「すぐれた文学」とは、「満たすことなしに意味作用を提起しうる文学」なのである (AIR, p. 38)。

無限に続く記号過程としての文学（つまり、「セミオーシス」としての文学）、意味の裏切りの体系としての文学（つまり、「健全なごまかし」としての文学）という考えは、そのまま晩年の『開講講義』(1978) に引きつがれてゆく。

13. 断　片　化

若いバルトが、ジッド（とくにその『日記』）を愛読したことはよく知られている。彼が最初に書いた（といってよい）テクスト (1942年）は、「アンドレ・ジッドとその『日記』について」のエッセーだった。晩年のある対談（「リール」

誌、1979年4月、p. 31)のなかで、彼はこの間の事情を説明している。

「青春時代に、ジッドの作品を読んだことは、私にとって非常に重要なことであり、私が何よりも愛読したのは、彼の『日記』でした。その不連続な構造、50年以上にわたる《パッチワーク》的な面によって、常に私を魅惑してきたのは、この本です。...私をひきつけたのは、まさにそうした断片的な側面なのです。そういうわけで、私はいつも断章形式によって書きたいと思っているのです。」

事実、この最初のテクスト(「ジッド論」)がすでに断章的であり、また、それ以後も、彼は短い形による書き方をやめなかった。「断章」というテーマはバルトと切っても切れない関係にあり、彼自身この問題についてはいたるところでふれている。その断章志向が、すでに「ジッド論」にきわめて明瞭に認められるということは、やはり驚くべきことである。といっても、それは最初から意図的だったわけではない。しかし、それだけにますます、バルトの体質に深く根ざしていると見ることができよう。1975年の対談でバルトは言っている。「断片に対する好みは、私にとって大変古くからのものです。...それまでは決してなかったことですが、私は自分の本や雑誌論文を読みかえしてみて、はじめて自分がいつも断章形式で書いてきたことに気づきました。...短い形式に対するこの好みが、今では組織化されています」(VMC, pp. 29–30) と。

この組織化された断片化、戦術としての断章形式は、言説の流れを中断し、記号の論理をかき乱す機能をもつ。中性的なものが範列論的対立を「中和」したとすれば、断片化は統辞論的強制を「中和」し、意味が固まることをふせぎ，いわば「論理の暴力」を「中絶」するのだ。もちろん、文の統辞法を破壊しようというのではない。そのような破壊は、「きわめて粗末な転覆」であり、「無意味の意味」として回収されてしまう (D, p. 23)。バルトが好む不連続構文、接続語省略法、並列法などは、論理の支配をまぬがれた言説の各要素の自由な統辞を求めるのである。

14. フェティシズム・アナーキズム

バルトにおける断片化の好みが、一方においてフェティシズムにつながることは容易に察しがつく。事実、バルトには「言葉をいささかフェティッシュ化する」(RB, p. 170) 傾向がある。断片化の好みは、まさにそれを証明するものである (VMC, p. 37; RB, p. 74)。彼にとっては、「読書の快楽は、明らかに

ある種の切断から生じる」(PT, p. 14)。したがって、彼は明らかに「フェティシスト型の読者」(PT, pp. 99–100) に分類される。そのうえ、彼が言うように、芸術の本質的な作業は「切り取る」ことにあり、諸科学のように区分したものをたえず統合しようとはしない、とすれば、芸術そのものが「倒錯的」、「フェティシスト的」なのだ (RB, pp. 72–73)。彼にとって「文学とは常に倒錯行為である」(OL, p. 16)。

また他方、バルトにおける断片化が、一種のアナーキズムに通じることも容易に理解できよう。といっても、この「アナーキズム」は、バルト (L. p. 24) が自分自身について言うように、「支配しない主義」という語源的意味をも含むものでなければならない。すでに「ジッド論」の冒頭では、「体系」や「秩序」に対する不信によって、断章形式が正当化されていた。

「決して満足できないことがわかっている一つの体系のなかに、ジッドを押しこめてしまうことを恐れて、私は以下のばらばらな覚え書にどんな関連を与えるべきか探ってみたが、むだであった。よく考えてみると、それらをそのまま提出し、不連続性を隠そうとしないほうがよいのだ。対象をゆがめる秩序よりも、不統一のほうが私には好ましく思われる」(AG, p. 24)。

「ジッド論」の断章形式は、対象そのものの不連続性(たえず変貌するジッドとその『日記』の断片性)に由来するのか、それともバルトの断章志向に由来するものなのか、それを言うことは不可能であろうが、少なくともバルトにとっては、すでにこのときから、「体系」は「決して満足できない」ものであり、「秩序」は多かれ少なかれ「対象をゆがめる」ものであったと言うことができよう。彼が望む言説は、「法」や「暴力」の名のもとにおこなわれる言説ではない (RB, p. 87)。のちにバルト (RB, pp. 174–175) が言うように、体系の固有性は「支配制御する」ことにあり、テクストの固有性はまさに「支配制御できない」点にある、としたら、支配制御することを拒む人間は、テクストに直面していったい何ができるのか。「装置としての体系」をしりぞけ、「エクリチュールとしての体系性」を受け容れることである。

15. 論述形式

一般に、「断片」は「全体」を予想するが、バルトの「個人的なテーマ系」にあっては、「断章は全体と範列的に対立するものではない」。それはむしろ「連続したもの」、「途切れることなくどこまでも流れ出すもの」に対立する。知の

領域にあっては、そうした連続性の戯画的な形が、たとえば「論述形式（ディセルタシオン）」であり、「展開（デヴロップマン）」なのである (PR, p. 220)。「論述」は、「自分の言うことに最終的な一つの意味を与えようとする考えにしたがって構築される」。これこそ過去の修辞学全体がつとめてきたことである。断章はそれを打ちこわし、「文を、イメージを、思考を粉々にして、そのどれもが《固まる》ことのないようにする」(VMC, p. 30) のだ。

「ジッド論」はすでに「論述形式をともなわないエッセー」(SZ, II) だったが、断章の好みが増すにつれて、当然、論述形式に対する「不寛容」、「嫌悪」の念も増していく。1970 年のある対談では、「多かれ少なかれ修辞学的ないし三段論法的な表現のモデル」にしたがって書くことはもはやできないし、書く喜びも感じられないと語っている (LA, p. 244)。後年の彼にとっては、「不連続な言説」によって「論述的な言説」を解体し、散布することだけが可能となるのである。

文学的言説と不連続性の問題は、ビュトールの小説『モビール』を論じた 1962 年のエッセー、「文学と不連続」(EC, pp. 175–187) によって集中的にとりあげられている。それによれば、文学的言説の連続性という価値の背後には、「生命」の神話が隠されている。伝統的な修辞法が、「展開＝発育（デヴロップマン）」という概念にもとづく秩序を要求するのは、そのためである。主題は、「変奏」によって「展開」されると同時に、生物学的な「生長」の運動に運ばれて、一個の「偉大な生命体」を生みだしていかなければならない。これが「古典的な修辞法」、「変奏の美学」の要請である。

これに対して、「転移の修辞法」、「差異の弁証法」というものがある。修辞学的連続は「展開」し、「敷衍」し、変形しながら繰り返すのに対して、こちらは組み合わせだけを変えながら繰り返す。それは「フーガ的連続」であって、そこには「それとわかる断片」がたえずもどってくる。前者にあっては、いったん述べられたことは、決してふたたび述べられはしないが、後者にあっては、新しいものが古いものをともなってたえず繰り返される。そこには「差異の関係とそれらの差異の配置」(EC, p. 185) しかない。このようにして、「繰り返される単位」と「自律的な諸系列」との「無限に可能な置き換え」が、作品に「独自性」と「意味」を保証するのである。

この考えは、のちにいたるまでほとんど変わらない。たとえば、1970 年代の「テクスト理論」における「作品」と「テクスト」の対比は、つぎのようになる。「作品は《有機体》のイメージに関係する。有機体は生命による拡大、《発育

＝展開》によって成長する。《テクスト》の隠喩は、《網目》のそれである。《テクスト》が広がっていくのは、ある結合関係の、ある体系性の効果による。それゆえ、生命の《尊重》は、《テクスト》にとってまったく不要である。《テクスト》は《砕く》ことができる」(OT, p. 230)。

旧修辞学の規則にしたがう「作品」に対して、「テクスト」の場では、記号表現が(永久カレンダーのように)たえることなく生成されるが、その生成は、成熟という有機的な過程によってではなく、「ずれ」、「一部重複」、「変異」といった「系列運動」にしたがっておこなわれる。「テクスト」を規正する論理は換喩的なのである (OT, p. 288)。「テクスト」は「引用の織物」として定義され、それらの「引用」(「かつて読んだもの」)は「既知のコード」に属しているが、しかしその結合関係は唯一であって、これが「テクスト」を差異にもとづいてつくりあげ、差異としてしか繰り返されないようにするのだ (p. 229)。

16. 網　　目

ジッドの『日記』の断片性とともに、バルトはジッドの作品がもつ網目の性格を指摘し、それを「注」や「照合」の観念によって説明した。「ジッドの作品は、どの網目も見逃してはならない一個の網状組織である。彼の作品を時間的に切ったり、方法論的に切っていくことは、完全に無益であると私には思われる。それはある種の聖書〔共観福音書〕のように、照合一覧を手にして読まれるべきである。あるいはまた、欄外の注が本文に爆発的な価値を与える、あの『百科全書』のページのように読まれるべきである」(AG, p. 26) と。

ここにはすでに、通時的、体系的説明に抵抗を感じるバルトの体質が明瞭に認められる。言うまでもなく、「網」とは共時的空間のイメージであり、網目と網目の関連は、可逆的、複線的であるはずだ。初期のテーマ論(たとえば、『ミシュレ』1957年)から、70年代の「テクスト理論」にいたるまで、網目のイメージは一貫してバルトのもとに見出される。彼がジッドの作品に認めた網目の性格は、逆にバルトの「ジッド論」の基本的性格でもあると言えるだろう。しかし、どんな網目なのか。

「ジッド論」の冒頭で、ばらばらな覚え書に「いかなる関連を与えるべきか」と自問し、「そのまま提出するほうがよい」という答えを出したとき、問題となっていたのは、「いかなる関連」だったのか。断片的な覚え書を「そのまま提出する」というのは、単に「思いつくまま」、「書いた順序のまま」提出する

ということであろうか。「照合一覧」や「欄外の注」といった比喩が示唆するように、「不連続」であってしかも照応する断片群の「不統一」または「統一」とは何であろうか。「ジッド論」はこの点について何の説明も与えていない。

30数年後、断章形式を「意図的に」採用した『ロラン・バルト』(1975) は、配列の順序について同じように自問する。「この本の断章を書いた順序はほぼおぼえているが、しかしその順序はどこから生じたのか? どんな分類法、どんな脈絡にしたがって書いたのか?」(RB, p. 151) と。しかしここでは、書いた順序やそれを決定した「脈絡」は、もはや問題にならない。逆に、そうした時間的論理的秩序を打ちこわすことが問題なのだ。だからこそ『ロラン・バルト』は、「すべてを消し去り、すべての起源を隠してしまう」アルファベット順を採用するのである。それゆえ、アルファベット順そのものが好ましくない意味効果を発揮するようなら、それをくずし、「さらに上位の規則、断絶の(異質論理の)規則」にしたがって、「意味が《固まる》のをふせが」なければならない(RB, p. 151)。

要するに、小さな網目が出来たとしても、それらが「互いにつながらないようにすること」、それらの網目が「この本の構造」、「この本の意味」となるような「大きな網目」にならないようにすること、言説が一つの主題に収斂せず、「無秩序という秩序」にしたがうようにすることが重要なのである (RB, p. 151)。

では、断章の配列にはどん組織化もありえないのか。いや、そんなことはない、とバルトは言う。断章相互の関連は、「音楽の連環形式の考え方」にしたがう。つまり、「個々の小品は、それだけで充足しながら、しかも、隣接した小品と小品との間でしかない」(RB, p. 98) ことになる。「エクリチュールが間以外の実体をもたない」(SZ, LXXXVIII) ように、断章で構成されたテクストは、いわば間だけで構成されたテクストなのである。

17. 循 環

「ジッド論」には まだ(あるいは、すでに)網羅性の幻想、「全体性の怪物」(RB, p. 182) が顔をのぞかせていた(「どの網目も見逃してはならない」)。それは「完結した作品」、「閉じたテクスト」、要するに「構造」を予想する。これに対して「構造化作用」、「無限の言語活動としてのテクスト」などの考えが前面に出てくるのは、初期の静態的な「構造主義」を通過してからである。

70年代のバルトにとっては、あらゆる作品を一つの「百科事典」と見なす「反構造批評」が問題となる。それは、作品の「秩序」ではなく「無秩序」を探し求める批評となろう。バルトによれば、あらゆるテクストは、単純な隣接性のあや(換喩や接続語省略)を用いて、数々の雑多な対象(知や官能の対象)を登場させる。この意味において作品は、百科事典と同様、雑然たる対象のリストを含んでいる。そのリストこそ「作品の反構造」であり、「作品の隠れた狂気の雑纂」なのである(RB, p. 151)。彼が愛する百科事典的性格とは、「« 他者 » を « 同一のもの » に還元することによって変質させることがない」点にある(RB, p. 87)。雑然たる対象を同一性によってではなく、ただ差異によって結びあわせること、これがバルトの「百科事典主義」なのである。

しかも「断章の百科事典」では、諸要素が単に並置されるだけでなく、循環的に交流する。「百科事典（アンシクロペディ）」は、その語源からしてすでに「とどまることのない知の循環」を意味する(SE, p. 81)。

ソシュール―(『般言語学講義』第II編第5章)は、連合の場を定義するにあたって、辞項の順序の不定性と辞項の数の無限性とをその特徴とした(「ある一つの辞項は、星座の中心のようなものであり、他の同位にある諸辞項が収斂する一点であるが、それらの辞項の総数は不定である」)。しかし、ソシュールによれば、この順序の不定性は常に確証されるが、数の無限性は必ずしも実現されるとはかぎらない。バルト(EC, p. 241)は、これを受けて、バタイユ(『眼球譚』)の隠喩の「起源のなさ」と「ヒエラルキーの欠如」と「循環性」を指摘しているが、循環運動こそ、数の無限性を実現するものである。それは「起源」や「ヒエラルキー」を消滅させるだけでなく、限られた数を無限の数に変える。循環とは、たえざる中心の移動であり、果てしない横断である。「いわば世界の本性そのものを示す無益な横断」(OL, p. 17)である。

バルトがいたるところで援用する辞書の比喩もまた、二つの点で「世界の言語的本性」(SZ, XLV)を示す。まず第一に、バルトにとっては「世界は常に « すでに » 書かれてしまっている」(SE, p. 51)。「世界は言語活動によって斜めにとらえられ、端から端まで書かれている」(CO, p. 615)。作家たちが長いあいだ「現実」と呼んできたものは、果てしなく積み重ねられてきた数々のエクリチュールの全体にほかならない。書くということは、世界を構成するこれらのエクリチュールを横断し、「引用する」ことなのである。つぎに、辞書はそれぞれの語についてポジティヴな定義を与えるかに見えるが、この定義そのものに用いられている語がさらに定義されなければならず、どこまでいっても

きりがない。ポジティヴなものはたえず「他の場所」に繰り越される。そこにはただ差異と循環しかないのだ。

18. ユートピア

バルトの「複数主義」は、「対決や範列」を解消し、意味と同時に性をも複数化する」ことを求める。意味は、テクスト理論におけるように多重化され、性のほうは、いかなる類型論によってもとらえられなくなる。たとえば、性の二元性から解放されて、ただ「種々の同性愛」だけが存在することになろう(RB, p. 73)。バルトが夢想するフーリエ流のユートピアにあっては、もはや、さまざまな差異だけしか存在せず、その結果、互いに異なるということが、もはや互いに排除しあうということにはならないだろう (RB, p. 88)。

争いを差異に変えること (PT, p. 27)。争いは性的であり意味的だが、差異は複数的であり、官能的であり、テクスト的である。差異が価値をもつのは、それによって争いが避けられ、克服されるからである (RB, p. 73)。バルトが「テクスト」を愛するのは、それがどんな口論、どんな論争《ロゴマシー》(言葉の格闘《マケー》)も存在しない稀な空間だからである (PT, p. 28)。言語戦争のなかの静かな瞬間、それがテクストなのである (PT, p. 49)。したがって、「テクスト」は、それなりに社会的ユートピアの様相をおびる。少なくとも、それは言語関係の透明さが実現される場であって、そこではいかなる言葉も他の言葉の優位に立たず、すべての言葉が循環交流するだろう (OT, p. 232)。

テクストの快楽を味わいつつある読者は、テスト氏を裏返しにしたような一種の反英雄である。彼は自分のうちにある仕切りや階級性や排他性を廃絶する。折衷主義によってではなく、「論理的矛盾」を追放することによって廃絶する。両立しがたいと思われている言葉であっても、かまわずに混ぜあわせる。没論理、無節操といった非難にも黙って耐える。自己矛盾という最大の恥辱にも動じない。こうした反英雄にとっては、もはや言語の混乱は罰ではない。それは「幸福なバベル」となるのだ (PT, pp. 9–10)。

「友愛の圏」もまた、差異の空間である。友人たちについて語るときは、どうしても彼らを「偶発性——差異において」とらえないわけにはいかない (RB, p. 68)。ところで、「差異の結合は、各項の個別化が尊重されることを前提とする」(SFL, p. 104)。友愛についてバルトが望むのは、「独占的な関係」(所有、嫉妬、口論)でもなく、共同体的な関係でもない。はっきりした差異によって

特徴づけられた特権的な関係」、「絶対的な独自性」の関係である。そこで、彼の「友愛の圏」には、数々の特権的な「双数関係」が生まれることになり、友人とひとりずつ会わざるをえなくなる。グループ、仲間、パーティーへの抵抗がそうさせるのだ。均一でない複数性、無差異＝無関心（アンディフェランス）ではない複数性を求めるからである (RB, pp. 69–70)。

バルトの「複数主義の哲学」は、要するにフーリエ主義的で、全体化に反対し、差異に向かう。そのユートピアは、「無限に細分化された社会」を想像するところに成り立つ。といっても、その分割はもはや社会階級的なものではなく、したがって抗争的なものではない (RB, p. 81)。社会的分裂は一般に社会関係(言語関係)の不透明さを生みだすものであるが、このユートピアにあっては、「社会的対話の固形性」が透けて見えるほどにうすれ、「社会関係の最終的な透明さ」が得られるだろう (RB, p. 141)。

19.　アトピスム

しかし、ユートピアはバルトが目指す最終地点ではないように思われる。というのも、「アトピアはユートピアにまさる」(RB, p. 53)、とバルトは言っているからである。「ユートピアは、反作用的、戦術的、文学的であって、意味から生じ、意味を作動させる」(同上)。この点で、バルトの言語圏の内側にとどまっている。ちょうど、バルト自身が宿命的に「ある一つの場所」(知識人という場所)、「ある階級の居住区」を割り当てられている (RB, p. 53) のと同じように。しかしアトピスムは、バルトが「これに対抗して心にいだく唯一の主義」である。アトピアは「言語的アナーキーの不可能な地平」(L, p. 27) にある。少なくとも言語圏のなかにはない(もちろん外にもない)。それはどんな場所にもない。ユートピアが複数主義から生まれるとすれば、アトピアはニヒリズムから生まれるのだ。

バルト (FDA) によれば、「アトポス」とは、「分類しえない」、「たえず予想外な独自性を示す」(p. 43) ということである。「無垢のものとしてのアトピアは、記述や定義や言葉の手に負えない」(p. 44)。ソクラテスは「アトポス」と形容されたが、「アトポス」の真の意味は、「形容できない」ということであろう (p. 44)。したがって、バルトのアトピアについては何も言うことができない。しかし、その「何とも言いようのない」アトピアは、言語圏を脱しようとするバルトの最後の希求を示すものではないであろうか。

Sigles et Références

Livres de R. Barthes

DZ *Le degré zéro de l'écriture*, Gonthier, coll. « Médiations », 1969.
EC *Essais crttiques*, Seuil, 1964.
ElS *Eléments de sémiologie* (avec DZ), Gonthier, coll. « Médiations », 1969.
FDA *Fragments d'un discours amoureux*, Seuil, 1977.
L *Leçon*, Seuil, 1978.
My *Mythlogies*, Seuil, coll. « Points », 1970.
PT *Le plaisir du texte*, Seuil, 1973.
RB *Roland Barthes par Roland Barthes*, Seuil, coll. « Ecrivains de toujours », 1975.
SE *Sollers écrivain*, Seuil, 1979.
SFL *Sade, Fourier, Loyola*, Seuil, 1971.
SM *Système de la Mode*, Seuil, 1967.
SZ *S/Z*, Seuil, 1970.

Articles, Contributions, Entretiens de R. Barthes

AG Notes sur André Gide et son Journal, in *Magazine littéraire*, N° 97, février 1975.
AlR L'analyse rhétorique, in Université Libre de Bruxelles : *Littérature et Société*, Editions de l'Institut de Sociologie, 1967.
AR L'ancienne rhétorique, in *Communications*, N° 16, 1970.
CO Changer l'objet lui-même, in *Esprit*, avril 1971.
D Digressions (Entretien), in *Promesses*, N° 29, printemps 1971.
LA Entretein, Deuxième entretien, in R. Bellour : *Le livre des autres*, L'Herne, 1971.
OL Où/ou va la littérature, in R. Pillaudin (éd.) : *Ecrire . . . Pour quoi? Pour qui?*, Presses Universitaires de Grenoble, 1974.
OT De l'œuvre au texte, in *Revue d'esthétique*, N° 3, juillet-septembre 1971.
PR *Prétexte : Roland Barthes* (colloque de Cerisy), Union Générale d'Editions, coll. « 10/18 », 1978.
R Réponses, in *Tel Quel*, N° 47, automne 1971.
VMC Vingt mot-clés pour Roland Barthes (Entretien), in *Magazine littéraire*, N° 97, février 1975.